

---

# 思い出上映会

忍者猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

思い出上映会

### 【Nコード】

N5947S

### 【作者名】

忍者猫

### 【あらすじ】

「私」が出会った、映画館の不思議な話。

（前書き）

とある文学賞に出した作品。

入賞は逃したけど、作品集に載せないかと声掛けいただいたもの。  
でも自腹が辛いのでお断りしました。

無収入時の30万は泣くしか……っ

そこが映画館だなんて、私は暫く気が付かなかった。入り口に、ポスターの一枚がある訳でなく、がらんとした店構えに思わず踏み込むのを躊躇してしまった。

「お客様、間も無く開演ですよ？」

真後ろからの声に、私は飛び上がりばかりに驚いた。

振り向けば、『案内係』と書かれた腕章をつけた女性が、私に向かって微笑んでいた。

「え、あ、その、今持ち合わせ無くてっ！」

そう言った私に、彼女はにっこりと笑った。

とても綺麗だったけれど、酷く作り物めいた……そう、アンティーク人形を思わせる笑みと共に、彼女は私の背を押した。

「大丈夫、本日は無料上映ですわ。さあ、どうぞ」

渡された半券には、『本日《思い出》上映会』とのみ、書かれていた。

さほど大きなホールではなかったが、座席は殆ど埋まっていて、私は辛うじて一番後ろの、通路脇の席に座る事が出来た。

その席の横、通路を挟んだ反対側の席の老人が声を掛けてくれたからだ。

「こちらが空いていますよ？」

「すみません」

一礼すると、私は携帯電話を取り出し電源を切った。

そんな私の行動に、老人はちよつとだけ頬を緩め、そして顔を正面に向けた。

私が正面を向くと、まるでそれを待っていたように照明が落され、ステージ上の緞帳が上がった。そして始まった映画に、題名は無か

った。

音も無く、そして一面の麦畑の光景から、その映画は始まった。ハーベストイエローが、風に波打つ中を、小学生くらいの男の子が歩いている。何処かの良いところの子供らしく、白いシャツと白い靴下と、光るエナメルの黒い靴を履いた男の子が、物珍しげに麦の穂の波を眺めている。

と、その時だ。小さく、そして泣き疲れているらしい掠れた鼻声  
が、まるで救いを求めるように歌を歌っていた。

『……誰かさんと誰かさんが麦畑……ちゅっちゅっちゅしてるよ良  
いじゃないかあ……』

声に気付いた男の子が、近くの麦を掻き分けて畑の中に入ると、  
麦の穂の間で小さな男の子が 幼稚園児くらいの男の子が、大き  
な瞳から涙を零しながら膝を抱えていた。

その子に手を差し伸べてやるところで、画面は麦の色で塗り込ま  
れたように金色に染まった。

カメラが引いて、麦畑は一面のひまわり畑に変わった。

一面のひまわりの間に、線を引いたように一本、あぜ道が走って  
いる。

私には、それが先ほどの麦畑のあぜ道に似ているように思えた。  
カメラが、そこを走る一台の自転車を捕らえた。最近はやりのス  
ポーツサイクルではなく、時代掛かった黒塗りのごついものだ。

それに乗っている少年には見ええが あった。先ほど歩いていた小  
学生の成長した姿らしい。

ひまわり畑の真ん中で自転車を止めると、周囲を見回し、やあら

彼は歌い始めた。ボーイソプラノとしては少々低いが、とても良い声だ。

『誰かさんと誰かさんが麦畑、ちゅっちゅっちゅしてるよ良いじゃないか。僕には恋人いないけど、何時かは誰かさんと麦畑』

その声につられる様に、大きなひまわりが揺れて誰かが顔を出した。

それが、あの時泣いていた男の子だったのはすぐに判った。

二人は楽しそうにふざけあい、無骨な自転車に二人で乗ってあぜ道を走り出した。

引いたカメラが、あぜ道を走って行く二人と、その遙か先で小さく走る蒸気機関車の姿を捉えた。カメラは滑るように列車を追ひ、そして駅に入った。

駅では、たくさんの人々が集まって万歳三唱をしていた。だが、演出なのか声は無い。

垂れ幕と、泣き崩れる女性と、無音の狂乱の中、あの二人がいた。先程よりもう少しだけ年を取って青年になった二人が、軍服に身を包み、人々に向かって敬礼していた。

年上の青年の方は士官の、もう一人は下士官の服装で、そして垂れ幕には二つの任地が書かれており、二人が別々の戦地に向かう事を知らせていた。

無音の世界を切り裂くように、汽笛が鳴り響いた。

列車に乗り込むとき、二人は人から見えないようにそっと手を握り合っていた。

そして、二人の乗った列車は、夕暮れの光の中に走り出した。光の中に走って行った列車の影が完全に見えなくなると、くるりとカメラは反転した。

カメラのアングルが変わると、それが時の流れを示すように世界が一転していた。

そこは宮々と広がる荒れ野と化していた。  
最早ひまわり畑も、麦畑もそこには無い。

だが、沈み行く夕日が、かつてのあの日々のように大地を金色に染めるだけだった。

その思い出の地に、士官として旅立った青年が立っていた。

ぼろぼろの、極僅かな荷物だけを持って、汚れた包帯で腕を吊つて、彼はそこに立ち尽くした。

何かに縋るように、彼は歌い出した。掠れ切った声で。

『誰かさんと……誰かさんが麦畑、ちゅっちゅっちゅしてるよ良いじゃないか……。僕には……恋人いないけど……。何時かは誰かさんと麦畑……。』

画面に釣り込まれていた私は、そこで気が付いた。その掠れた歌声が、自分の横から聞こえて来る事に。

そう、自分に席を教えてくれた、あの老人が歌っているのだ。

「……帰って来い。お前の事だ、また帰り道が判らなくて座り込んでいるんだろう?。」

掠れた声に、私は思わず老人を振り返ろうとした。その時だ。

かつんと、硬い靴音がして、誰かが通路に立った。

「ただいま」

柔らかい、とても優しい声がした。

動けない私の横で、誰かが立ち上がる。

「……遅いじゃないか」

「ごめんな、待たせてしまった。こんなに待たせるつもりなんて、

無かったんだ」

顔を上げると、あの日列車に乗って出て行った下士官の青年が、あの時とは身なりの違う士官の青年と抱き合っていた。

「もう良いさ、帰って来てさえくれたなら」

「ああ、還ろう。俺達の故郷へ」

そして二人は肩を抱き合い、すぐ側の扉を開いた。

私はその扉の向こうの、延々と広がるハーベストイエローの海と、それを二つに区切るあぜ道を見た。

そしてその細い道を、手を握り合った二人の男の子が、笑い声を立てて走って行くのを、ずうっと見ていた。……筈、だった。

ぱっとホールが明るくなり、私は目を瞬かせた。

後ろを振り向いていた筈の私は、真っ直ぐと前を向いていて、目の前の緞帳はちょうど閉まり終えたところだった。

しかも、満席で端の方に座っていた筈の私は、何時の間にかホールの真ん中の最上の席に座っており、そしてたった今終わった筈のホールの中に、残っているのは私一人だった。

それだけではない。

ここに至って思い出したのだ、上演前まで聞こえていた人の声が、映像が始まると同時に一切聴こえなかったと……そう、呼吸音すら聴こえなかったのだと。

事態の異様さに、私は慌ててホールからまろび出た。

灯りの消えたロビーを走り、出入り口に転がるように辿り着くと、あの案内係の女性が閉館の札を持って立っていた。

「す、すみません、ここの映画館、私以外にも観客いましたよね？」

「ええ、勿論。皆様もうお帰りになられましたよ」

笑顔の彼女のその言葉に、ほっとしたのは一瞬。

私は慌しく頭を下げると、人影を求めて外へと飛び出した。とにかく、早くここから離れなければと気が急かされた。



彼女のいう『帰る』という言葉が、私の頭の中で『還る』という言葉に変わったのだ。

言いようの無い不安から、私は人のいる場所を求めた。暗い場所から、人工の光が溢れる町の中へと。

その私の背中に、その声は投げ掛けられた。

「貴方には縁を感じますわ。またのご来場を、お待ちしております」  
彼女の声は、なぜか長く耳に残った。

あれから一週間。

私は、あの『思い出上映会』とは、つまり見に来た人間に思い出を見せ、そしてその中に還すものだったのではないかと睨んでいる。だが、そうするには私に思い出が少なすぎたのだろう。

あの老人の思い出を垣間見た理由は、今も良く判らない。始まる前に口を聞いた所為とも思えない。

だが、私はあそこに戻って見る事はしていない。

あそこにあの映画館があっても、無くても恐ろしいのに変わりはないからだ。それに、あの時の案内嬢の言葉もある。

だから私は、手の中に残っている半券を、まだ捨てられずにいる。

（後書き）

コンセプトは、「世にも奇妙な物語」。

いずれ続きを書きたいと思っていたけど、最近ネタを忘れ気味。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5947s/>

---

思い出上映会

2011年4月21日00時41分発行